

## ＜前回・自然神学拡張を再考する＞

### （1）伝統的な自然神学理解

1. 芳賀力『神学の小径Ⅲ——創造への問い』（キリスト新聞社、2015年）
2. ジョン・ポーキングホーン「3 終末論の信頼性：創発的な目的論的なプロセス」（ピーターズ他編『死者の復活——神学的・科学的論考集』日本キリスト教団出版局、2016年、72-88頁）

↓

啓示神学と対立する悪しき神学、疑似科学といったイメージをいまだ脱していない。

3. トーマス・F・トランス『科学としての神学の基礎』教文館、1990年。

Thomas Forsyth Torrance, *The Ground and Grammer of Theology*,

University Press of Virginia, 1980.

4. モルトマン『神学的思考の諸経験——キリスト教神学の道と形』新教出版社。

### （2）自然神学とは何だったのか

5. キリスト教思想の発端における自然神学に遡って考えること。

Jaroslav Pelikan, *Christianity and Classical Culture. The Metamorphosis of Natural Theology in the Christian Encounter with Hellenism*, Yale University Press, 1993

, *What Has Athens to Do with Jerusalem? Timaeus and Genesis in*

*Counterpoint*, The University of Michigan Press, 1997

↓

- 1)キリスト教自然神学の原点としての4世紀：ヘレニズムとの出会い
- 5)哲学者の自然神学と神話的寓意的神学との区別
  - 哲学者の神話批判を異教批判として利用する。伝統への肯定と否定
- 6)弁証としての自然神学（Natural theology as Apologetics）
  - 対論（問いと答え）が成り立つには、その共通の基盤が必要である。
  - 宇宙論（自然学から形而上学へ）という枠組み。
- 7)前提としての自然神学（as Presupposition）・対異端論争（一神教内部での論争）
  - 異端を論駁のための諸前提、何が共有され何が異なっているか。
6. キリスト教思想の形成の二つの動機・文脈
  - ・キリスト教の弁証
  - ・キリスト教内の論争：正統と異端
    - コミュニケーション合理性の問いとしての自然神学。
7. 中世の自然神学：アンセルムス『プロスロギオン』、トマス『神学大全』
  - 自然神学の議論は、自然理性によって知られる事柄を信すべき事柄として信仰に接続すると同時に、「神から啓示されうるもの」（divinitus revelabilia）を理性によって到達可能な事柄として自然理性に示すことによって、啓示・信仰と理性との間の双方向の運動が生じるべき思惟の場を構成している、それは信仰と無関係に独立して存立できるものではない。
8. 自然神学の可能性を論じる際のポイント。

②自然神学あるいは神の存在論証は信仰内容をめぐるコミュニケーションにおける合理性の確保の問題と解することができる。信仰対象である神との関係で言えば、それは祈りや讃美のコンテクストにおける信仰の表明であり、同じ信仰を有する共同体内部では信仰者各自の信仰内容の合理的表現を可能にし、信仰内容が変質し逸脱するのを防ぐ機能を果たしうる。また、信仰者自身にとっては、信仰内容の自己理解を促す。以上は信仰共同体の内部コミュニケーションであり、自然神学はその合理性の確保に関わっていることにな

る。次に、異端者や有神論的異教（キリスト教に対してはユダヤ教、イスラム教など）に対しては、自然神学は、論争相手がどんな原理に立っているか、またお互いが原理のどの部分を共有しているか、一致できない部分は何か、などを明確化し、その上で論証が可能な場合にはその論証の合理性を確保するのに貢献しうる。もちろん、論証が不可能な場合は、相互の論破という作業に移る。無神論者の場合も理論的には異端者や異教の場合と同様であり、こうした外部コミュニケーションにおいて自然神学のなす貢献は、共通の議論の場を明確にし、対話可能性の範囲を明示することである。いずれにせよ、現代に思想状況において自然神学の可能性を考えるときの第一のポイントは自然神学を宗教におけるコミュニケーション合理性の問題と考えるという点であろう。

### (3) 自然神学を拡張する

自然神学が、他者とのコミュニケーションの可能性あるいは公共性に関わるものであるならば、それは、「キリスト教思想と自然科学」という問題領域に限定されないはず。

自然科学から、社会科学そして人文科学へ  
キリスト教から、諸宗教へ



今後の方針。まず、「キリスト教思想と社会科学」からはじめる。

社会教説：環境と経済、政治

9. Alister E. MacGrath, *Science & Religion. An Introduction*, Blackwell, 1999.

(マクグラス『科学と宗教』教文館)

10. 自然神学を、神学と諸科学とが共有する自然本性に基づくコミュニケーションの問題と考える。神学と対論すべきは自然科学だけではない。

神学の対論は、社会科学、人文科学へと拡張する必要がある。

もっぱら自然科学との対論に止まっていた自然神学の視野を拡張すること。

### (4) 具体化の試み——キリスト教政治論

11. 拡張の方法論：聖書テキストの解釈から。

古典的な自然神学を参照して。

創造論から自然へ。聖書の創造物語と自然学・宇宙論

12. 科学技術の神学

文明論としての科学技術論

政治、経済、社会、科学技術は、文明論として関連付けられる。

## 2. キリスト教と政治的なもの

・政治：宗教と経済の間

道徳（実践理性＝合理性）と重なりつつもはみ出る領域

欲望と超価値

・現代政治哲学・神学の起点としてのカール・シュミット

### (1) 「政治的なもの」とは何か

0. 南原繁の価値並行論

「南原繁の「価値並行論」とは、真・善・美という学問的・道徳的・審美的価値の他に、正義という社会的価値があり、宗教は一個の価値というより、諸価値の背後にあって、生命と力を与えるものであるという論であり、南原の世界観の中核であった。」（山口周三「南原繁の「価値並行論」とその今日的意義——特に宗教観に関連して」、南原繁研究会

『無教会キリスト教と南原繁』EDITEX、2012年、151頁)

「宗教はその本質から言って他の諸価値と並行することをもって満足することができず、いかなる人間生活と行為にも必ずやその根底にあってそれを支え、その一切を貫いて常住の力と生命を与えるものは宗教的信仰であるからである」(『国家と宗教』1942年、岩波文庫324)。」

「国家的政治的価値と個人人格価値を、その他の文化価値とともに、並列・相関々係において考え、そしてその下限に経済的非合理性と据え、上限に宗教的非合理性をもって覆おうとする。」(『自由と国家の理念』の「新幀版序」、『南原繁著作集 第三巻』岩波書店、3頁)

宗教(根底、力) / 文化・諸価値 / 経済

政治はどこに位置するか

1. キリスト教と国家との関係は、キリスト教思想にとって避けることのできない課題。

Peter Scott and William T. Cavanaugh (eds.), *The Blackwell Companion to Political Theology* (2nd edition), Wiley-Blackwell, 2008.

宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社、1978年——『平和思想史研究』(宮田光雄思想史論集1)創文社、2006年は、この増補決定版である——。

芦名定道「近代キリスト教と政治思想——序論的考察」『基督教学研究』第28号、掲載予定。

2. シャンタル・ムフの「ラディカルで多元的な民主主義」(radical and plural democracy)

ロールズの正義論・政治思想を論評

「ロールズは、初めに彼の正義論を道徳哲学への寄与として提示した後に、それは政治哲学の一部として見なされるべきであると宣言したのである。ここでの問題は、最初からロールズが、道徳的言説に固有の推論様式を使用していたという事実である。この推論様式を政治の領域に適用すれば、その帰結は、道徳の諸制約のもとで種々の私的利益を調停する一種の合理的プロセスへと政治を還元してしまうことである。」(ムフ、1993、98)

3. 道徳と政治との基本的な相違、政治の固有性は合理的な調停プロセスの内に存しない。

ムフ → カール・シュミット

4. アーレント(遺稿集『政治の約束』)の場合

「ポリスにおける人々の共同生活をその他のあらゆる形態の人間の共同生活——それらについてギリシャ人たちは、間違いなく、よく知っていたはずだ——から区別するのは、自由である。……自由であることとポリスに住むことは、ある意味では、同一のことだった」(アーレント、2008、148)、「政治の意味とは、以下の通りとなる。すなわち、自由な人間たちが、強制も暴力(force)も互いの支配もなく、平等者中の平等者として、相互に交流することができる。また、互いに命令と服従を行うのは例えば戦時のような緊急事態が発生した場合のみであり、そうでない限りは、互いに語り合い説得し合って自分たちのすべての問題を処理することができるということである。」(同、149)

政治：自由な共同性において、相互の説得のための言論を用いた合意形成の営み

5. シュミットの場合

「政治的な行動や動機の基因と考えられる、特殊政治的な区別とは、友と敵という区別である」(シュミット、1970、15)、「友・敵概念は、隠喩や象徴としてではなく、具体的・存在論的な意味において解釈すべきである。すなわち、経済的・道徳的その他の諸

概念を混入させて弱めてはならず、いわんや私的な個人主義的な意味で、心理的に、個人的な感情ないし性向の表現と解してはならない」(同、17)、「したがって、敵とは、競争相手とか相手一般ではない。また反感をいだき、にくんでいる私的な相手でもない。……敵には、公的な敵しかいない。なぜなら、このような人間の総体に、とくに国民に関係するものはすべて、公的になるからである。敵とは公敵であって、ひろい意味における私仇ではない」(同、18-19)、「敵という概念には、闘争が現実にも偶発する可能性が含まれている」(同、25)、「戦争は決して、政治の目標・目的ではなく、ましてその内容ではないが、ただ戦争は、現実的可能性としてつねに存在する前提なのであって、この前提が、人間の行動・思考を独特な仕方規定し、そのことを通じて、とくに政治的な態度を生み出すのである。」(同、27)

↓

政治：合理的な合意形成の事柄ではなく、公的全体のレベルでの「友一敵」関係の問題であって、現実的可能性としての戦争を前提としたもの。友・敵の闘争と社会的欲望を前提として構築された公的営み。

6. 「政治的なもの」を構成する二つの契機：

合理的討論による合意形成、社会的欲望に連合した闘争

合理性と欲望の間＝「生」

7. 問題は、言論か欲望か、道徳か政治かの二者択一ではなく、両契機の相違を見据えた上でそれらを積極的に媒介すること→イデオロギーとユートピアという社会的欲望・構想力の二つの病理形態への適切な対処。

イエスの宗教運動についての最近の知恵思想の観点からの研究は、宗教的な知恵思想が、イデオロギーやユートピアという社会的構想力の問題と密接に関わっていることを示している(芦名定道・小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社、2001年、63-67頁)。

8. 政治的なものから人間学的考察への遡及。

9. 前期ハイデッガー：『存在と時間』の基礎的存在論

事物存在と人間存在の決定的な差異を解明した点で、基礎的人間学と解釈できる。

世界一内一存在としての基礎構造、事物を規定する範疇に対する実存疇、そして、人間存在の時間構造(企投性と被投性)と将来性の優位、本来性と非本来性との対比など、

10. 「死への存在にとって問題である死は、徹頭徹尾『可能性』という存在性格をおびている。ハイデッガーが死への存在の『非本来的』な様態と見なしているのも、可能性としての死から逃避し、目をそむけようとするあり方のことであった」(森、2008、152)、「他者の死は本来のテーマとなりえない。なぜなら、死とは『本質上そのつど私のもの』(SZ,240)だから」(同、158)、「現存在分析論とは、『際立った現存在確実性』(SZ,256)を一貫して探求する歩みであり、それが死の確実性において絶頂を迎えるのも、理の当然なのである。」(同、162-163)

11. ハイデッガーの基礎的人間学：死において端的に提示された、現存在の「自己関係性」

「単独化」の循環構造をその基本的性格(実存論的「独我論」)としている。

↓

複数性の視点が欠如した人間学とその政治思想

- ・大澤(2007)——「ハイデッガーの死に対する見方の中には、どこを探しても、『イスラーム教徒』が収まるべき場所がない」(同、725)。
- ・内田樹「レヴィナスの時間論」：『時間と他者』と読む14

『福音と世界』2016.5、新教出版社)

「レヴィナスはそこに隠された問題の霊的・歴史的次元を開示する。」

「ハイデガーの「被投性」はただの「投げる」(werfen)の過去分詞形から作られた名詞に過ぎない。そこには「神」も「孤独」も「破壊」も含まれていない。しかし、レヴィナスにとって被投性とは単に「投げ入れられていること」ではなかった。」

「レヴィナスが「投げ入れられた」のは捕虜収容所であり、彼のリトアニアの親族たちが「投げ入れられた」のは強制収容所であった。」(53)

「ハイデガーにおいて、ドイツ民族の根源的使命から分離されているドイツ人は存在しえないし、存在すべきではないのである。」

「フェアリアス」

「たしかにそれは1933年のドイツ人にとっては、強いリアリティと喚起力を持った言葉だと思う。けれども、同じ言葉がユダヤ人にとってはまったく逆の意味を持つことになった。」(54)

「実存者がそこに根を下ろすこともできないにもかかわらず、まさに実存者が今まさにそこに投げられている「場」のことである。」

「レヴィナスの鍵語である「ある(イリヤ)」のこれが初出である、「実存者なき実存すること」という事況を言い表すのにこれほど適した表現はないとレヴィナスは思ったのだろう。」(55)

12. ホップズ『リヴァイアサン』: 17世紀(混乱の世紀)の時代状況を背景とした、いわば複数性の下における死の考察。

自然状態(万人の万人に対する闘争 → 可能性としての戦争、相互恐怖・相互不信)から国家の成立を論じた社会契約説を展開しているが——個人は自己の自然権を制限し、社会契約の結果として成立する国家理性に判断を委ねる——。

13.、自然状態=人間の徹底的平等を内包した「殺されうると殺しうることの相互性」として、つまり死の平等性(=複数性としての死)。

14. 「自然状態の脅威から免れるべく結ばれた社会契約の平和のもとではじめて、つまり近代『社会』の枠内でのみ、われわれは、『世人』が押し付けてくる『水平化』や『平均化』の弊について気軽に語れるのだ、と。ハイデガーが『公共性』に敵意をあらわにしているのは、ホップズ以後の近代的『平等』の理念の圧倒的勝利を物語る一事例にはかならない、と。」(森、2008、203)

15. 「《人々は生まれつき平等である》 自然は、人間を、身心の諸能力において、つぎのように平等につくった。すなわち、あきらかに他人よりも肉体的につよく、あるいは精神が敏活な人が、しばしばあるとしても、しかもなお、すべてをいっしょにしてかんがえると、人の人との差異は、ある人がそれにもとづいて、かれのものとして要求する利益はどんなものでも、他人がかれと同様に主張してはならぬというほど、おおきくはないのである。すなわち、肉体のつよさについていえば、もっともよわい者でも、ひそかなたくらみにより、あるいはかれ自身とおなじ危険にさらされている者との共謀によって、もっともつよい者をころすだけのつよさを、有するのである。」(ホップズ、1651、199)

16. ホップズの「万人平等説」: 「無力さにおける平等」(森、2008、187)、すなわち、「すべての人間が、本性上『か弱い』存在」(同、189)であるとの認識に基づき、「『殺されやすさの平等』は、どんな弱者であろうと強者を倒すことができる、という『殺しう

ることの平等』と一つであり、それゆえ、誰にも『逆転』のチャンスがある」(同、192)ことを主張する。『リヴァイアサン』で示された共存の論理が、『死の脅迫』に満ちた現代世界の危機的情況を先取りするような新しさをもちえているのは、各自性を徹底させた形で死の平等性を唱えたからこそなのである」(同、183)。

17. 弱さの平等性という人間学→殺し殺されることの平等の可能性(身体の脆さ)に基づいて、相互的恐怖、相互不信を生みだし(自然状態の脅威)、人々を社会契約による社会秩序の平和。社会契約。

「政治的なもの」：敵対を前提とし、その破壊的帰結に至ることを回避する手段として政治、「政治的なもの」を規定する言論と欲望の弁証法。

cf. 弱いものの強さ

18. アーレント：人間存在の複数性の上に政治思想を構想。
19. 言論と行為の脆さの議論 → 人間存在の有限性から罪責性に至る問題連関。  
リクール「過ちやすき人間」(L'homme faillible)の議論。
20. ホッブズの社会契約を可能にするもの(相互不信を克服するもの)、あるいはアーレントの言う赦しと約束とを可能にするものは何か。ここに、政治と宗教との根本的な接点を見出すことができる。
21. 契約、赦し、約束から政治思想の問題領域へ。  
この聖書の宗教の基礎に属する事柄を、非聖書的(非宗教的)に論じることの意義。  
cf. ボンヘッファーあるいはシモーヌ・ヴェイユ

↓

契約思想

#### <文献表>

1. E. トレルチ『古代キリスト教の社会教説』高野晃兆・帆苅猛訳、教文館、1999年。  
Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen* (1912), *Gesammelte Schriften I*, Scientia Verlag, 1977.
2. シャンタル・ムフ『政治的なものの再興』千葉眞他訳、日本経済評論社、1998年。  
Chantal Mouffe, *The Return of the Political*, Verso, 1993.
3. ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学術文庫、1994年。  
Hannah Arendt, *The Human Condition* (1958), 2nd Edition, The University of Chicago Press, 1998.
4. ハンナ・アレント『政治の約束』ジェローム・コーン編、高橋勇夫訳、筑摩書房、2008年。  
Hannah Arendt, *The Promise of Politics* (Ed. by Jerome Kohn), Schocken Books, 2005.
5. C. シュミット『政治的なものの概念』田中浩・原田武雄訳、未来社、1970年。  
Carl Schmitt, *Der Begriff des Politischen* (1927), Hanseatische Verlagsanstalt, 1933.
6. 森一郎『死と誕生——ハイデガー・九鬼周造・アーレント』  
東京大学出版会、2008年。
7. ホッブズ『リヴァイアサン(一)』水田洋訳、1954年。  
Thomas Hobbes, *Leviathan* (1651), Wider Publications, 2007.